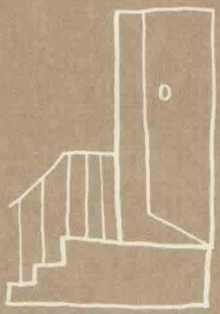
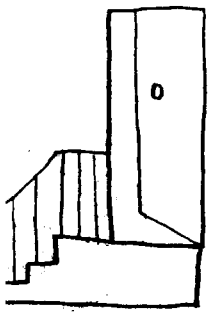
# OPEN HOUSE



# OPEN HOUSE



H. TSUJI

SHUEISHA

オープンハウス

一九九四年三月一〇日　第一刷発行
一九九四年五月二三日　第二刷発行

著者　辻仁成（つじ ひとなり）

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
編集部（〇三）三二三〇―六一〇〇
電話　販売部（〇三）三二三〇―六三九三
制作部（〇三）三二三〇―六〇八〇

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1994 Hitonari Tsuji, Printed in Japan
ISBN4-08-774057-9 C0093

# 目　次

オープンハウス　7
グッバイ　ジェントルランド　59
バチーダ　ジフェレンチ　103

装帧　日比野充希子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# オープンハウス

# 奇妙な鼓動

なんて奇妙な私の鼓動
トゥントゥントゥン　トゥントゥントゥントゥントゥン…
シンコペートしてるから
もっとそばで聴いてみて
トゥン　トゥ　トゥン　トゥン…
いつもと違う私の鼓動が
あなたを浮き浮きさせるなら

私にはできる

トゥントゥントゥントゥントゥン

鼓動を変えることだって

そして心臓(ハート)が鳴る音で

二人で

即興演奏(インプロヴィゼーション)するの

トゥントゥントゥン　トゥン　トゥン

トゥン　トゥン　トゥントゥントゥントゥン…

BATIDA DIFERENTE Duval Ferreira Mauricio Einhorn（野谷文昭・訳）

# オープンハウス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 1

エンリケは吠えることができない。

彼はベランダの隅に固定された犬小屋の中にうずくまり、投げ出した足の上に顎をのせていつも遠くを眺めている。潤んだ大きな目に精彩はなく、目尻には目脂(めやに)が溜まっている。垂れ下がった耳は萎(しお)れた雑草のようだ。犬小屋のあるそのベランダは五階という高さも手伝って見晴らしは抜群なのだが、彼が間違って飛び下りてしまわないようにと全体に金網が巡らせてあり、エンリケはそこをうろうろ歩きながら眼下に広がる都会の景色をじっと

見下ろす日々を送っている。ここで彼が過ごすようになってからもう早いもので半年が経つ。ここに来たばかりの頃は、部屋の中に上げたりもしていたのだが、今では、カーペットが汚れるからとミツワの許可が下りない。ベランダだけが唯一、彼の生きる世界なのだ。可哀相だが、しかし僕には立場上どうしてやることもできない。個人的にはつれだして外を走らせてやりたいのはやまやまだが、動物を飼っていることが管理人にばれてしまうと何かと面倒くさいと、やはりミツワに強く釘をさされた。

僕は彼の方へ餌の入った皿を差し出す。食欲がないのか、あまり反応が返ってこない。僕たちは暫く見つめ合い、エンリケの方が先に視線を逸らした。肝心な時に味方になってくれない僕を、主人とは認めていないようなそんな目の逸らし方だ。どうした、元気がないな。僕は低い声でそう尋ねてみる。親をまったく無視する子供のように、しかし彼は金網の向こう側をじっと見て視線を戻そうとはしない。僕はため息をつく。最近はずっとそんなやり取りが続いている。それで餌を食べないのかと思えば、暫くたって皿を取りにきてみると、餌はすっかりなくなってしまっているのだ。犬らしくない、と腹をたててもみるが、こっちに責任があるのだから仕方ない。

まだ、彼がここにやってきたばかりの頃は彼にも何かを訴える力はあった。どんなに苦しくても、犬らしく吠えて伝えようとした。しかし、電気的な苦痛、３５００ボルトの電圧からくる苦痛は、彼からまもなく犬本来の忠誠心をも奪い取ってしまう。彼がわが家へ来たその日（ミツワの知り合いのマキという女の子が、バリ島に遊びに行っている間だけエンリケはうちで預かることになったのだが）、彼は喉元に「鳴き声防止訓練首輪」と称する高電圧ショック器を取り付けられることになった。首輪にくっついたフィルムケースほどの大きさの装置は、彼が吠えると高電圧が流れる仕組みになっていて、一度僕もどれほどのものかと自分の腕に巻きつけ、犬の鳴き声を真似て吠えてみたことがあるのだが、セーターを脱ぐときに起こる静電気の数倍の刺激が全身を駆けめぐり、あまりの激しさに引っ繰り返ってしまった。そればかりかエンリケは中型犬なのに、彼の喉元に付けられているその器械は大型犬用のものなのだ。ちょっとの間だから我慢しなさいね、と言ってそのマキという女は僕たちの見ている前でエンリケの首にそれを取り付けてしまった。しかし、一週間で帰ってくるはずの彼女はそのままバリ島で消息をたってしまう。僕が心配して、捜索願いはでているのか、と訊ねると、どうせ男でも出来たのよ、とミツワからはに

べもない返事が返ってきた。エンリケに関して言えば本来ならマキの家族にでも引き取ってもらうべきなのだろうが、僕はもちろんミツワさえも、マキの素性をちゃんとは把握していなかった。ミツワがマキと知り合ったというディスコにも行ってみたのだが、彼女のことは誰も話したがらない。しつこく聞こうとすると、なにされたか知らないけれど諦めたほうがいいわよ、とせせら笑われた。どうもそういうタイプの女だったらしい。保健所にでも連絡して引き取って貰うしかないか、とミツワは折にふれて言うのだが、一度テレビでそういう犬たちがゴミのように処理される番組を見たことがあったので、僕はそれには強く反対をした。しかし反対した瞬間から実質、犬の管轄は僕に移行し、それ以降僕が彼の面倒を見ることとなった。保健所にも引き渡せない、外に連れだすこともできない、そして飼い主は行方不明。そのせいでこの半年間、エンリケは「鳴き声防止訓練首輪」を付けたままにされている。

エンリケの立場と僕の立場は似ているところがある。居候という意味では僕もエンリケと大して差がない。一年程前、僕の場合はホームレスだったところをミツワに拾われた。

ホームレスといっても友達の家を転々と移り住むジプシーのようなもので、あの頃僕は定住する家を持ってはいなかったということである。友達に、モデルクラブの子たちを集めてホームパーティをやるから遊びに来いよと誘われ、いそいそ出掛けていった会場で、僕は彼女と知り合った。彼女の親友の友達が僕の友達の恋人だった。もちろん彼女の職業もモデルである。

どっちかというとミツワの方に一方的に気に入られたという感じだった。しかし何処が気に入られたのかはいまだに僕にも分からない。僕は精彩のある方ではないし、飛び抜けて人付き合いが上手いわけでもないからだ。二人きりになったとき軽い気持ちで、破産しちゃって行くところがないんだ、と言うと彼女は、じゃあ私の家へ来なさいよ、とあっさり誘ってくれた。はじめは冗談だろうと思っていたのだが、パーティが終わりに近づくと彼女は、暫く僕のことを遠くからじろじろと眺めまわしたあと傍にやってきて、君がよければさっきの話本気にしてもいいのよ、と耳元で意味ありげに呟いた。なんて返事を返せばいいのか分からず、へらへら笑っていたら、彼女は真面目な顔をして僕の腕に手を絡ませてきた。少し怖い気もしたが、それ以降僕はミツワの家に転がり込むこととなる。

あの頃、僕は二十代という若さで法律的な破産を経験していた。ミツワのところへ転がり込む直前のことだ。クレジットカードを使いまくって、気がついたら支払い不能になっていた。いろんなクレジット会社のカードを作った。赤やらシルバーやら緑やら、様々なカードが僕の財布の中で犇めいていた。お金はなかったが金持ちになったような気分だった。そして見せびらかしたり、眺めたりしているうちに僕は当然の如く、それを使い過ぎてしまう。女友達の前でカードで支払うことは一種の快感だった。単純といえば単純だが、それくらいしか自分をアピールする術を知らなかった。へえ、かっこいい、などと煽てられ調子に乗った自分の愚かさには、後でいやというほど思い知らされることになる。頭金無しの月々三十六回払い。僕はそのコピーに唆され、どんどん次から次に手を出していった。買えないものはない気がした。僕は錯覚の中にいた。今思えば明らかに病気だ。そして破産の直前には、僕が借りていたワンルームマンションは、様々な商品の倉庫と化していた。

両親は健在だったが、彼らは僕の借金を肩代わりできるほど裕福ではなかった。あの日、民事訴訟法にのっとって審理された後、破産宣告を受けた僕は裁判所を父と弁護士に付き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.